

mediopos 17

2015.12.22 ~ 2016.1.15

【神秘学ポエジー～風遊戯 第39集】

media-photo-poesie ヴァージョン

mediopos401-425

神秘学遊戯団

mediopos-401

2015.12.22



ただ否定するのはカンタンだ

否定する足場を変えなくてすむ

じぶんはここにいてなにかにNO!といえる

わたしとあなたの関係は

最初から最後まで変わらない

けれどじぶんの足場を変化させるとき

それは成り立たない

大きな声をあげる人は

そんな人のことだ

わたしは変わらない

あなたも変わらない

地は地 天は天のまま

観察するものも

観察されるものも

その場所を変えない

思考と感情と意志の予定調和も同じだ

それらの関係が変わらないとき

思考は感情を導きそして意志となる

または意志がありそれが感情を導き思考となる

けれど思考と感情と意志がばらばらになると

それらを予定調和させることはむずかしい

現実と虚構も

生と死も

わたしとあなたも

その関係が変わると

すべてはむずかしくなる

たとえそれが一見して

カンタンそうに見えていても

カンタンそうに見えているからこそ

わかりやすく見えるものはむずかしい

むずかしく見えるものは意外にやさしいのだ

知識人や専門家はむずかしく見える言葉で

きわめてやさしいことばかりを並べたてる

安心することだ

ほんとうのところすべてはとてむずかしい

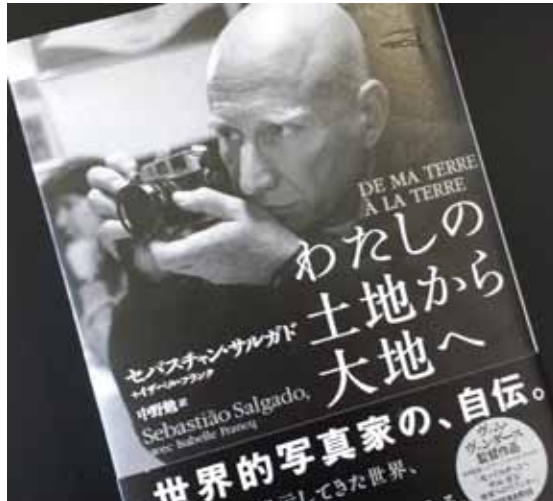
じぶんだけがわからないわけじゃないのだ

■加藤典洋『村上春樹は、むずかしい』(岩波新書 2015.12)

「一言でいえば、村上春樹は、そんなに親しみやすくも、わかりやすくもない。見くびってはならぬ。／「村上春樹は、むずかしい」のである。」

「村上春樹の小説世界の前期から後期への変化を一番よく示すものは、隠喩的な世界から換喩的な世界への移行である。／隠喩的、換喩的というのは、ここでは、比喩の二つの代表的原理というくらいに受けとってほしい。隠喩的(メタファー・メタフォリック)は喩えるものと喩えられるものが「つながる」ばあい、換喩的(メトノミー・メトニミック)は喩えるものと喩えられるものが「つながらない」ばあいである。(・・・)／ここでは、その従来型の世界、「頭」と「心」と「からだ」が一つになっていた世界を隠喩的、それらがばらばらになった世界を換喩的、と呼んでいる。(・・・)／社会への反逆、変革の思いなどという否定性が広範に存在するには、世界が隠喩的であること、「頭と心とからだ」の一体性が保たれていることが、必要である。でもその土台が崩れ、換喩的な世界が現れると、否定性も解体される。それは別の問題、別の生きがたさ、別の「損なわれ方」に取って代わられるのである。／そういう変化の突端が、『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』の問題だったということも、いまなやよくわかる。／このような全史をへて、村上の小説世界はいま、『海辺のカフカ』に来て、とうとう一つの逆転現象を起こしているのである。／これまで主人公＝語り手は、「僕」(「ぼく」)で、いわば「頭と心とからだ」が一体の隠喩的な世界に住んでいた。その彼の前から突然いなくなるのが、最初は死者で、そのあとはこうした換喩的な「ばらばら」の世界の住人たちだった。／しかし、この来て、今度は「ばらばら」な世界の住人である「田村カフカ」が、主人公＝語り手の座を占める。彼から見られた世界、彼に生きられる世界が、私たちの前に広がる小説世界になる。／これまで登場人物として現れて異質な地点として点滅していた換喩性が、今度は世界のすべてを覆う、というか、世界全体になる。／「全体的な喩」(吉本隆明)という面白い概念があるけれども、喩がいわば、全体化するのである。」

「この隠喩的から換喩的への移行は、すぐにわかるように、もう一つの移行を伴っている。／隠喩的な「一体的」な世界では、人がこちら側から向こう側に行くことは、生の世界から死の世界へと移ること、死ぬことを意味していた。だから、『風の歌を聴け』『1973年のピンボール』『羊をめぐる冒険』の前期鼠三部作では、向こう側の世界とは「死」の世界のこと、民俗学的にいう「他界」のことだった。村上の小説世界でいえば『ノルウェイの森』まで、向こう側とは、死んで人が赴く世界、他界であった。／でもそれが、「頭と心とからだ」がばらばらな世界になると、からだはこちら側にあって、心と頭はもう向こう側に行っている存在、からだと頭はふつうのままでも、「心」だけが死んでいる存在――生きた死者・死んだ生者という意味ではゾンビ敵な存在――が現れてくると同時に、そのような存在だけが行ける向こう側の世界が生まれてくる。向こう側が、いわば「他界」から「異界」へと変わるのである。」



■セバスチャン・ダルガド+イザベル・フランク『わたしの土地から大地へ』（河出書房新社／2015.7）

「まずはじめに、わたしはこの惑星（ほし）と出会った。前から世界中をまわってはいたけど、このときは世界の内側に入っていくような気持ちがあった。世界をいちばん高いところからも、いちばん低いところからも見たし、ありとあらゆるところに行った。鉱物や、植物や、動物を発見したし、それからわたしたち、わたしたち人間を、人類のはじめにそうだった姿のままで見ることができた。おかげですごく心強くなった。起源の人間はとても強くて、わたしたちがその後、都会化して忘れてしまった何かをたくさん持っている。わたしたちの本能だ。この本能のおかげで、たくさんのものを嗅ぎつけたり、予知したりすることができる。動物の行動を観察して、気温の変化や気象現象を知るとか。現実には、わたしたちは自分の惑星（ほし）からどんどん遠ざかっている。都市というのはまた別の惑星だから。」

「[GENESIS]のおかげで意識するようになったのは、都市化の結果として自分たちを自然から切り離したせいで、わたしたちはとてもややこしい動物になってしまったということだ。この惑星と疎遠になったせいで、わたしたちは奇妙な存在になってしまった。だけどこれは解決不能な問題じゃない。対策のカギは情報にある。もう少しでもこうした情報を提供できたんだとすれば、わたしは幸せだ。理解してもらえればと思うのは、人間やすべての種が絶滅の危機に瀕しているとしても、その解決は時代に逆行することじゃなくて、自然のほうへ戻っていくことだ、という点。レリアとふたりで、ブラジルで再植林のするというかたちでやったのがそれだ。」

「わたしたちが環境にたどり着きたいきさつは変テコだ。ときどき自分に聞いてみる。いったいどういう風の吹きまわしだったんだろう？ 答えは「時代」だ。何年も前に、時代が工業の変化へ、それから移民へとわたしたちを連れていったのとまったく同じだ。レリアとわたしにとって大事なことは、いつでも自分の時代にかかわるような生き方をすることだ。活動的でいることだ。つまるところ、どうしていまやっているようなことをはじめたのかと聞かれたら、わたしたちはうしろをふり返って、自分たちの人生の結果として、いまいる場所にたどり着いたんだな、と気づく。」

この惑星に生まれ
この惑星に育ち
この惑星と生きる

この惑星を汚せば
みずからを汚すことになる
この惑星を観れば
みずからを観ることになる

わたしに
体と生命と魂と霊があるように
この惑星にも
体と生命と魂と霊がある

わたしたちは
自分たちを変化させながら
この惑星の変化とともに
生きていかなければならない

この惑星を離れるとしても
わたしたちはこの惑星とともに
つくりだしたものと
これからも生きていこう

生と死を超えて
惑星と銀河を超えて
わたしという無限と夢幻とともに



■『野尻抱影／星は周る』（STANDARD BOOKS/ 平凡社 2015.12）
（声なき聖歌隊）

「ハッセは『夜の感情』という詩で、雲の裂け目から現れた月と星座が、見る見る輝きを増すのを、夜が、青ざめ煙る星の世界でハーブを弾いているためだと言っている。星々はそのハーブに合わせて歌っているのだろう。／星の静かなきらめきには、いわゆる「ささやき」を思うが、それが忙しくなるほど、声が聞こえそうな感じもしてくる。そして、青い星、黄いろい星、赤い星、その中間色の星は、それぞれの音色も、オクターブも異なっているし、同じ星でも気流につれてきらめきが早くなり遅くなって、ピッチが高まり低まりしているように感じられる。／これを最も思わせるのは、このごろのオリオンの星々である。一等星から五等星まで約四十、微光星をも加えれば約百三十というおびただしい数で、ほとんど青白い星だが、その光度に応じてきらめきを競っている。そして、代表的な星々が三つ星を中軸として整然たる配列をなしているのは、何か天上の聖歌隊を思わせる。／けれど、これは声なき聖歌隊である。そして木枯らしの吹きすさぶ頃の夜ふけに、激しくきらめきのはもちろん、このごろの霜に凍てた、または雪晴れの黒々とした空で静かにきらめいていて、しかも寂として音一つ聞こえないのは、見上げていて何か凄くなってくる。そして、この声なきコーラスは、天の深い深い奥の、人間の窺い得ぬものを、直接に私たちの心に伝えているように思われてくる。／これを化学的に言えば、無数の星々を統一している宇宙の大法則であろう。アインシュタインはその前に白髪のをたれた。けれど、目のあたり星空を仰いで、どうもそれでは満足されない。といっても、不信心な私のこと、何か神秘的な超自然の存在を感じるという以上には出られないのだが。」

星は歌っている
声なき声で歌っている

星は集い歌っている
天上の聖歌を歌っている

星を見る私は
私の故郷を見ている

星は私だ
星を見るとき
私はそこにいる

星は私だ
見えない星でも
私はそこにいる

星は私だ
星を忘れたとき
私はどこにいるのだろう

mediopos-404

2015.12.25



数値に呪縛された科学に芸術を！

そのとき宇宙は

はらかなエーテルの翼で

飛翔しているのが見えるだろう

そしてみずからも飛翔することだろう

地上に呪縛された人間に真の言葉を！

そのとき宇宙は

言葉と生命と人間の光で

輝いているのが見えるだろう

そしてそれは思考のなかで蘇ることだろう

■エルンスト・マルティ著・イルムガルト・ロスマン編

『エーテルと生命力／アントロポソフィーによる自然科学の拡張』（涼風書林 2015.8）

イルムガルト・ロスマンによる「まとめと展望」より

「あらゆる本性は——植物であろうが、動物、人間であろうが全く同様に——それが生物になると、これらの諸力をつかみ鳥、そこからエーテル体を形成します。／エーテル体は、建築計画のように、あらゆる有機体を織り成し、その有機体の形姿をさしあたり不可視の形で自分の中に担っている、力の形姿です。形態、生命、そして特定の物質が時間の中で現象へと入り込みます。／ルドルフ・シュタイナーはエーテル体に対してさらに別の名前、造形諸力体、生命体、エーテル的一エレメント的な体、そして時間体という名前を使います。それは、どのような側面のもとで彼がエーテル体を観察しているかによっています。私たちが形態の造形、形姿の発展を念頭に置く場合は、『造形諸力体』について語るすることができます。私たちが生命プロセスを、中心とリズムをもつ様々な生命器官を、そして時間的な発展段階を観察する場合は、『生命体』について語ります。そして私たちが素材プロセスと素材変換、物質発生と物質生成、生と死の変化を観察する場合は、『エレメント的一エーテル的な体』を通して特定の物質の秘密を究明します。人生のそれぞれの瞬間にエーテル体を《時間体》として観察できるものは、人生絵巻を人生の始めから終わりまで、その全体を見渡し、過去と未来の人生を見渡します。ここでは時間が空間になります。」

「自然科学は芸術へと上昇し、それによって生命とエーテル的なものの認識へと飛翔することができます！ 良き医師が趣味に音楽や絵画を練習すること、生物学者や化学者が良き随筆家や詩人であること、高名な物理学者が人生の終わりに哲学者に成り、自然の女神ソフィアへの遅ればせの愛を発見することでは十分ではありません。自然科学の時代においては、自然科学者は、学校や大学の若い人々を手助けし、彼らの行動の基準となる世界像や人間像に責任を担っています。自然がその《開示された秘密》を隠しているのは、絶対に自然のせいではなく、測定できるもの、数えられるもの、計算できるものへの、自然科学が自ら課した制約のせいなのです。（・・・）／エルンスト・マルティは、エーテル的なものに関する彼のセミナーの最後によく言っていたものです。未だエーテル的なものの1つの本質的な側面、すなわちエーテル的造形諸力の魂的諸力へのメタモルフォーゼ、変容が欠けていると。」

「エーテル的なものを把握する自然科学は、霊と物質の間の二元論を乗り越える自然認識になります。エーテル的なものの中に開示されているのは宇宙の言葉です。それを通して全てが生じました、そして今もなお生じ続けています。（・・・）／エルンスト・マルティは1973年に小さな瞑想的文章、『ヨハネ福音書の序章とアリストテレスのカテゴリー』を執筆しました。（・・・）彼はその中で書いています。

『ヨハネの序章の中で、『言葉』、ロゴスが人間との関係の中で宇宙創造者として描かれています。・・・序章には3つの象徴が働き掛けています。ロゴスは三分節的に出現します。それぞれの象徴は、ロゴスの1つの新しい眼差しを開示します、すなわち星、太陽、十字として。これらの3つの印の中にキリストの本性が開示されます。キリストは星と太陽と十字一空間の本性です。序章はその3つを言葉、生命、人間の光と呼んでいます。宇宙の現実はその開示です。展開の星々の中にロゴスの像が現れ、万有を貫き溢れる太陽の諸力の中に《彼の中の生命》が、その歩みを通して宇宙の十字を生み出す太陽の中に《人間の光》が現れます。』



憧れはどこから
やってくるのだろう

憧れは訪れ
憧れは光になり
憧れは育つ

憧れはどこへ
ゆくのだろう

憧れは種となり
憧れは理想を生み
憧れは新たな光となる

■今井信子『憧れ／ヴィオラとともに』（春秋社 2007.5）

「桐朋の頃は、突き上げるような憧れが常にあった。この人の演奏を聴きたい。この曲の楽譜を見たい、弾いてみたい。外国に行きたい、名前しか知らない先生に会いたい、師事したい……容易なことではないだけに、実現したときの喜び、充実感はひとしおで、それがまた次の憧れへと向かう原動力になった。／少し手を伸ばせば何でも手に入る今の時代、いったい何に対してそこまで憧れることができるだろう。それは、音楽そのものだ。それしかない。もはや、音楽を取り巻くもろもろが憧れの対象になる時代は過ぎ去った。その後に残るのは、音楽に心を振るわせて感動し、この音楽を弾きたい、伝えたいという強い憧れだけ。だからこそ、音楽を志す者はいっそう真摯に音楽と向き合い、自分自身と真剣に向き合っていかなければならないのだと思う。」

「音楽は、尊いものだ。私たち音楽家にいちばん大切なのは、音楽の偉大さを知り、音楽に奉仕すること。音楽に憧れを持ち続けること。／すべては、憧れから生まれる。」



■宮下奈都『羊と鋼の森』（文藝春秋 2015.9）

「もしかしたら、この道で間違っていないのかもしれない。時間がかかっても、まわり道になっても、この道を行けばいい。何もないと思っていた森で、なんでもないと考えていた風景の中に、すべてがあったのだと思う。隠されていたのでさえなく、ただ見つけられなかっただけだ。安心してよかったのだ。僕には何もなくても、美しいものも、音楽も、もともと世界に溶けている。」

正しいか正しくないかわからない
近道かまわり道かわからない
道をただ歩いていっただけだ

ぼくには何もないかもしれないけれど
何も見つけられないかもしれないけれど
そんなことはかまわない

美しいものも妙なる響きも
世界にはすべて溶けている
世界には何も隠されてはいない

ただ道をゆけば
見えてくるものもあるだろう
聞こえてくるものもあるだろう

すべてはそこにあるのだから
すべては開かれてそこにあるのだから
ぼくはただそこを歩いていっただけ



■薄田 泣菫『艸木虫魚』（岩波文庫 1998.9）

「唐辛よ。お前は何をそんなに怒っているのか。もっと平和な気持になって、御近所の衆と一緒に静な秋を楽しんだらどうだろう。トルコ人の被りそうなそんな赤帽子は腋の下にでもそっとおし隠したらいいではないか。（・・・）／唐辛は皮肉家だ。生まれつきするどい皮肉家だ。彼は自分にさわるものには、誰にでも容捨なく持前の皮肉を投げつける。彼には「わさび」や「からし」のようなユウモリスト達が、相手に辛い皮肉を味わわせながらも、同時にまた目がしらに涙を浮かべて笑いこぼらせる滑稽味が欠けている。彼はどこまでも単純だ。感情が激越だ。単純で感情が激越なればこそ、皮肉家なのである。／自然界のあらゆるものは性格をもっている。その性格にはそれぞれ変化があり、打開がある。たとえば柿や栗などは、初めのうちは渋いが、終いには甘くなる。蜜柑や杏のようなものは、初めのうちは酸っぱいが、終いには甘くなる。これらはそれぞれの性格の成長であり、飛躍である。悔悟であり、新生である。そんななかになつたひとり唐辛のみは、最初から終りまで同じ「からさ」の持ち続けである。何の変化もなく悔悟もない一本調子の生活ほど、気をいらだたせるものはない。日を重ねるにつれて唐辛の癩癩がいよいよ手におえなくなり、その皮肉がますますするどくなるのに何の不思議があろう。／かくして唐辛は、いつもあんなふうにはぼんぼん怒りどおりに怒っているのである。そして偉大なる太陽もそれをどうすることが出来ないのだ。」

怒る！
何に
誰が

怒りよ！
どこからくるか
どこへゆくか

怒りに
なぜはあるか
怒りは
いつのまにか現れる

怒りは
怒るために生まれるか
怒りは
何を生むか

怒りは
消えるか
怒りは
消えないだろう

怒りは
自分に向けられているからだ
怒りは
変わることを頑として拒むからだ

mediopos-408

2015.12.29



■林竹二・竹内敏晴『からだ＝魂のドラマ／「生きる力」がめざめるように』（藤原書店 2003.7）

（竹内敏晴）「私は、人間とはどういうものか、人間であるとはどういうことかということを考えてきたと思ったんですね。管理教育の中でガチガチになってる、企業の中で、頭を垂れ体をこわばらせて人の顔色ばかり見ている人がいる。人間ていうのはそれでいいのか、そういうもんじゃないんじゃないか、ということをも具体的に自分のからだや声の歪みや何かで気付いていくということをやってきた。そのことにまちがいはないと思いますし、それからまあ、最後の授業でね、湊川の若者に何で私が受け入れられるんだろうと思うと、要するに自分は、子どもの頃に難聴で、障害児であった、そういう体験から来るなにかしかないなあとは思ったんです。けれども、いずれもそれは、一番根底なことではあるけれども、何か足りない。林先生が、若者達に提出している問題は、人間であることではなくて、人間になること、でありました。さっきの映画を、私は何年かぶりかで見てあらためて思ったんですけれども、「学ぶ」ことによって人間は、人間になっていくという用語は先生は使われませんでしたけれども、学ぶということが他の本能によって生きる動物には基本的にない、人間だけにある、そのことによって、成長していくんだ、という意味のことを繰り返し、言われていました。人間である、ということの、豊かさ、とか、広がり、を説くのではなくて、それを越えて、ですね、人間になる、とはどういうことか、について、私は林先生に差し出せることがない、というふう思った訳であります。」

「林先生が、人間になるとはどういうことか、ということはずっと、私にとってはですよ、問い続けられた。あれは何の授業で言われたんだか忘れてしまいましたけれども、人間には、文化というものがあるが、それはお金では手に入らない、お金がなくても受けとれるものだ、ということ、湊川では何べんも言っておられる。人間の大事な文化遺産を受け継ぐということが大事だ、受け継ぐっていうと何か保守的に聞こえるけれども、それを自分で自分のものにする、といいますか、そのことをソクラテスの授業や何かで繰り返し説かれたんだと、私は受け取っているのです。」

あるがままには
なにかが欠けている

人間はそのまま
人間であることはできない

からだはそのまま
からだであることはできない

魂はそのまま
魂であることはできない

人間は
人間にならなければならない

からだは
からだにならなければならない

魂は
魂にならなければならない

人間になるためには
問い続けなければならないだろう

人間は
いつも人間への途上にある

人間は問い続け学び続けることで
人間への道を歩むことができる

問わなくなったとき
人間は人間であることをやめる



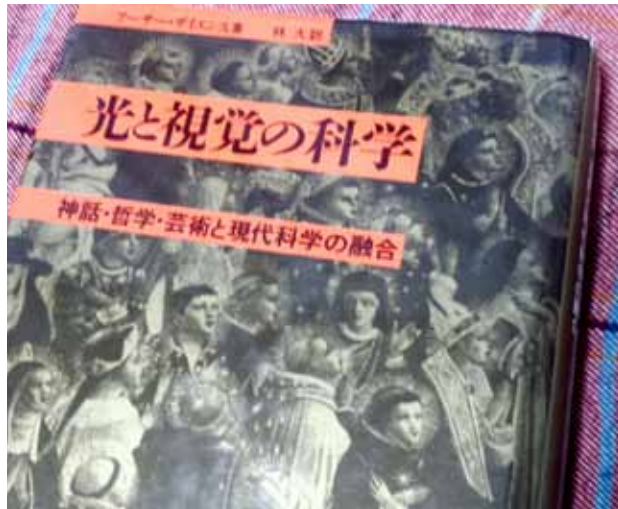
■ブルース・チャトウィン『ソングライン』（英治出版 2009.2）

「オーストラリアに来る前、僕はよくソングラインのことを人に話したが、相手はかならず別のおおを思い浮かべた。／「レイライン、みたいなもの？」という人たちがいた。（・・・）中国研究者たちは、風水でいう「龍脈」や伝統的な土占いを思い浮かべた。（・・・）ソングラインを記憶術のようなものと受けとった人たちもいた。（・・・）別の友人たちは、ナスカの地上絵を思い起こした。（・・・）／ちがう。ぼくがしたかったのはこんな比較ではない。もうそういう段階ではないのだ。僕はもっと先の地点にいる。（・・・）／こんな光景が僕には見える。ソングラインが、大陸や時代の境を越え、世界じゅうに延びている。人が歩いたところにはすべて、歌の道が残される（いまでもときおり、僕たちはその名残をとらえる）。これらの道は、時空を超えて、アフリカのサバンナの隔離地帯にさかのぼるものにちがいない。その地で最初の人類は、周りの恐ろしいものにひるむことなく口を開き、「世界の歌、の初めの詩句を叫ぶのだ。『私は！（アイ・アム）』」

見えない大地に
描かれているのは
歌で描かれた図絵
生きるということは
歌で大地を紡ぐということだ

見えない天空に
描かれているのは
光で描かれた図絵
祈るということは
光を天空へ捧げるということだ

見えない言葉で
描かれているのは
魂で描かれた図絵
創るということは
魂を言葉に吹き込むということだ



見ることは

学ばねばならない

光はただ光ではないからだ

自然はただ自然ではないからだ

深く深く見ることで

魂は変容してゆくだろう

光は新たな光へと変容してゆくだろう

自然は新たな自然へと変容してゆくだろう

■アーサー・ザイェンス『光と視覚の科学／神話・哲学・現代科学の融合』（白揚社 1997.9）

「芸術家も僧も知っている。修行の末の実践を通して、自然を内面化することができ、新たな能力を手に入れることができると。個人の成長は聖典の暗記やアカデミックな芸術的分析の問題であるだけでなく、実践を、日々の労働を必要とする。これによって、苦勞して得られる新鮮な魂の能力を作りあげるのである。手と目のあらゆる働きが魂を彫刻する。ピアジェはこの過程を順応（アコモダシオン）、つまり、新たな認知器官の発生と呼んだ。ゲーテ、ノヴァーリス、エマソン、シュタイナー……こうした人々は新しい感覚について語った。自然の限りない本質の新たな面をあらわにしてくれる感覚である。」

「何千年にもわたって、さまざまな文化が無数の光のイメージを受け入れては捨ててきた。同じように私たちは一生の間に、次々と現れる光の理解を受け入れては捨ててきた。研究、芸術実践、静かな瞑想を通して、つかみにくい光の本質は私たちの心の眼の中で絶えず自らを創り直し、どの世代にも新たなエピファニーを提示する。千個の眼で見れば、光はついには私たちが作った安息所で私たちとともに休息するだろう。／光を見るというのは、見えないものを見えるものの中に見るといふことのメタファー、私たちの惑星とあらゆる存在をひとつにまとめあげている脆い衣を看破するといふことのメタファーである。ひとたび私たちが光を見ることを学べば、他のことはすべて自ずとついてくるにちがいない。」

mediopos-411

2016.1.1



舞う

地が舞う

水が舞う

火が舞う

風が舞う

舞の精髓は

一露より出で

万物を成し

天地にあまねし

我は翁となりて

天を言祝ぎ

天を舞う

地を言祝ぎ

地を舞う

■高橋悠介『禪竹能楽論の世界』（慶應義塾大学出版会／2014.3）

「金春禪竹の『名宿集』などにかがえる翁信仰を読み解く上で、荒神という神が重要な鍵となるのではないかという問題提起を試みた。荒神は、今日の民間信仰ではほとんど竈神と同一視されているが、それは中世末期からのことで、より遡って荒神信仰の実体を掘り起こすことで、禪竹が翁面・鬼面を二相一如の構造で捉える一方、鬼面と荒神を結びつける背景や、円満井座の御影の衣鉢解釈に、胞衣や星宿が関わる理由などが、浮かび上がってきたのである。」

「猿楽が荒神と関わる契機には、修正会の追儺における盧舎夜迦役に加え、呪師と組んだ活動や、方壺という結界に関する技能が関わっていたのではないかと推測してみた。そこで荒神は、猿楽の始祖とされる秦河勝伝承の中に組み込まれることになり、その信仰は秦氏を称する猿楽の中である程度共有されたであろうが、禪竹はこれをさらに追求することで、翁や猿楽の芸能神をめぐる思考に荒神まつわる様々な性格を関係づけたと思われる。猿楽が翁猿楽を根本芸にすると共に、翁面を神格化して重視した前史には、寺院草創譚に登場する翁姿の地主神うや、神仏の化身としての翁をめぐる伝承が背景にあるだろうが、十三世紀前半にはすでに「仏兄」という仏に先行する原初神のような位置づけをされていた荒神の性格が、地主神としての翁と通じる点にも注意しておきたい。」

「禪竹の六論一露説は、世阿弥能楽論を基盤としつつも、様々な要素が詰め込まれた多面体の能楽論である。(…)／この「一露」は「一水」という用語とも密接に関わっており、こうした水に関わる用語を用いた譬えによって、舞歌の自在性や、身体の根源など、能まつわる重要な事柄を表現することが、禪竹能楽論の特徴の一つとなっている。(…) 中世密教においては、生命のエッセンスが露のような形象でイメージされており、禪竹はそうした生命力を舞台上の身体に導入しようとしたのではないだろうか。「一露」は凶形としては刃で表象されているが、「精」を冠した語で説明されることからしても、刃の形はこの露が精気に満ちた「ツヨキ能体」を生み出す身体の根源であることを象徴的に示すものとみられる。(…)／「一露」には、精気というだけにとどまらない抽象的な意味もある。『五音三曲集』に「山河大地・是非草木、万物皆此水体なり」とあり、『六輪一露之記注』では「一露」を「精心」「天地ノ精主、万物出生ノ精魂」という言葉で説明するように、禪竹は「一露」に世界の根源という意味を込めていた。このように歌舞を生み出す身体の根源をたどり、そこに世界の根源を重ねるような思考も、禪竹能楽論の大きな特徴であるが、そうした発想の淵源も、中世密教や密教を基盤とした神道説にあるらしい。／このように、禪竹の能楽論には、中世の寺院文化圏の中で形成された身体や世界の根源をめぐる思想を能の身体論として組み直した点に大きな特徴があるといえよう。それは、禪竹が説く猿楽の芸能神に、胎内から人の身体を守護する胞衣荒神の性格が濃厚にかがえることとも、響き合うものであった。」



■山本伸一『総説カバラ／ユダヤ神秘主義の真相と歴史』（原書房 2015.12）

「神は一体どのような姿をしているのか。これは一神教の思想家、特に神秘家にとっては、神を知るうえで究極的な問いである。なぜなら、誰もが神を目にすることができるわけではなく、その認識は神という存在を把握するためのひとつの到達点となるからである。神の図像化が進んだキリスト教の神秘主義では、逆説的なことに視覚よりも味覚や嗅覚のほうが神秘体験を記述する表現として頻出する。(・・・)／ギリシア神話や神道や仏教では、神々や仏菩薩のパンテオンが鮮やかに、そしてなんの臆面もなく描き出される。彼らにも目鼻があり、手足がある。神が人間と同じ姿形をしていても、疑問をさしはさむ必要はない。しかし、神を唯一とし、その似姿を造形してはならないと命じたユダヤ教では、神を人間と同じ言葉で表現しようとするときさまざまな問題が起こってくる。たしかに、神の姿について創世記では、「神は自らの形状に人間を創造し、神の形状に創造した」と書かれている。ここから、聖書の創造神は形而上学的な存在でも異形の生き物でもなく、人間の姿に似ていることがわかる。それでも、イスラエルの民がシナイ啓示で偶像崇拝を禁じられたことで、神を複製することは最大の禁忌となり、いかなるイメージでもその形状を描き出すことは許されない。」

「カバラの創造論は創世記の描写をもとにしながら、さらに『形成の書』のセフィロートとヘブライ文字による創造論から大きなインパクトを受けてきた。カバリストにとって聖書は秘密の源泉であり、『形成の書』はその秘密を授かった父祖アブラハムが書きつづった言葉であると信じられた。『清明の書』やフランス南部で展開した議論を経て、創造論をめぐるこうした秘教的解釈を一連の文学的な表現に組み入れたのが『光輝（ゾーハル）の書』である。『光輝の書』では創世記で語られるような神話的な創造の物語は影を潜め、神の世界に生じる光とエネルギーの流れとして表現される。『形成の書』とは異なり、セフィロートはダイナミックで有機的な連関として捉えられる。」

「ルーリア派の世界創造において重要なのは神の閃光を天に返す「修復」の作業である。ユダヤ人のなかでも、神の秘密に通じた人々だけが、悪の「外殻」のなかに混じっている聖なる閃光をもとの場所に戻すことができる。そのためには祈りと善行だけでなく、律法と戒律の深い意味まで知り抜いていなければならない。言い換えるならば、神秘家という特殊な人々の力によって、創造のプロセスが逆行し、歴史の円環が最初の点に戻っていくのである。この状態こそが歴史の終末であり、贖いの完成である。」

神は自らを観るために
みずからを分けてゆく
一なるものが二となる
二なるものが多となる

光は自らを観るために
光のない闇を生み出す
光と闇は交わりながら
色の世界をつくりだす

善は自らを観るために
善のない悪を生み出す
善と悪は交わりながら
不思議世界を紡ぎだす

人は自らを観るために
他者を必要としてゆく
他者を鏡に照らしつつ
自らの姿を思いえがく

人は神へと還るために
自らの内なる光を探し
闇のなかを照らしゆく
自らの顔を見出すため



■ヴィクトール・E・フランクル『虚無感について／心理学と哲学への挑戦』（青土社 2015.12）

「人生が全体として意味がないのであれば、愛の意味について詳細に語るには意味がない。そして愛について当てはまることは産まれることについても当てはまる。もし人生が無意味ならば、産まれることもおなじく無意味である。」

「フロイトの精神分析によると、人間の行動は快楽原則に支配されており、アルフレート・アドラーの個人心理学によると、ふつうの人は、優越への欲求に支配されていると言われる。（…）／自己実現についてはどうだろうか。たしかに自己実現は言うまでもなく価値がある。しかし結局は、自己超越を通してのみ、私たちは自己実現に達し得る。」

「実際の私の意見としては、人は快楽への意志によっても権力への意志によっても支配されることはなく、私の言い方でいうなら、人は意味への意志によってのみ左右されるのである。意味への意志は自分の実存により高く究極的な意味を与えるためになされる、人間の確固たる生得的な努力や苦闘である。」

「一般的な問い方で、生きる意味があるかと問うことが、結局は誤りだ、と今なら、私たちでもわかります。つまり、人生の意味を問うことは、私たちには許されていないのです。問いを出し、私たちに問いを向けるのが人生なのです。私たちは問われる存在なのです。答えなければならないのは私たちであって、すなわち、いつでも引っぱりなしに出される人生の問い、「人生の問題」に答えなければならないのです。／生きること自体、問われることに他ならないということであり、私たちの存在はすべて、答えることに他なりません。そしてそれは生きていくことに責任をもって答えることなのです。このように考えると、今では私たちが脅かすものは何もありません。未来も、また未来がないように思えることでさえも、怖くはありません。今や現在がすべてであり、その現在は人生が私たちに永遠に新しい問いを含んでいるからです。すべてはその都度、私たちに期待される事柄しだいなのです。しかしながら、どのような未来が私たちを待ち受けているかは、知ることができないばかりか、知る必要もありません。（…）／人生が私たちに提出し、その答えに瞬間の意味を実現できる問いは、たんに時々に応じて変わるだけでなく、人に応じてもまた変わるのです。人生が出す問いは、瞬間瞬間に、その人その人によってまったく異なってきます。ですから、生きる意味を問うのは、まったく具体的に、つまりことごと今においてなされなければなりません。」

「生きるとはそれ自身、問われることであり、答えること。それぞれ自分自身の生の責任を持って答えることである。それゆえ、それぞれの生は与えられたものとしてではなく、課せられたものであるように思われます。生きることはいつ何時でも課題なのです。そのことから、生きることは、困難になればなるほど、意味あるものになりうるという結論に達するのです。」

快楽を求めるならば
私は快楽を求める者となる

優越を求めるならば
私は優越を求める者となる

自己実現を求めるならば
私は自己実現を求める者となる

私は意味を与えられている
そして意味を与えるのも私

意味が与えられていないならば
意味を与えないのも私

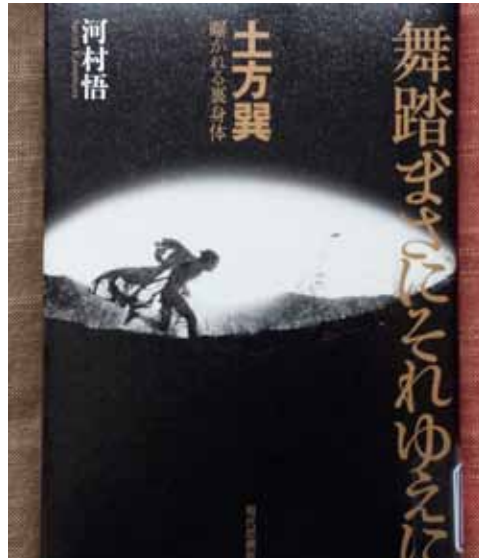
それらが意味を持たなくなるならば
また私は新たな意味を求めてゆく

私は常に問われている
そして問うのも私

問わないならば
問わないのも私

私はみずからを超えて
みずからを問い続ける

私という存在は
問いと答えの連鎖なのだ



未生の我を見据えよ
言葉の光に照らされる前の我を
見えることで見えなくされている我を

光と闇のあいだをうごめくなにものか
秩序と無秩序のあいだをゆれるなにものか
肉体という他性の闇に棲むなにものか

闇の子はもと光の子であった
闇の子は光へと帰還し得るだろうか
血を宿し薄膜のなかでうごめくものとして

■河村悟『舞踏、まさにそれゆえに／土方巽 曝かれる裏身体』（平凡社／2012.5）

「わたしたちはいずれにしろ、『薄膜』につつまれた生きものである。生の<原一領域>に起こっている「ある奇怪はうごめき」とは、けっして知のなかに同化しえない非知なる<もの>の黙示による呼び声であり、ことばなき発語の持続である。」

「あえて<他>性という語を使って言い表すとすれば、それは絶対的に、唯一の親密なる<他>性になければならない。それをことばの光によって捕捉される以前の生の<原一領域>に生息する<肉体の闇>と、わたしたちはよぶことにしよう。」

「なるほど光はそのまぶしさによって眼の精神を殺してきた。見えるものを見るだけなら、眼は機械の眼で十分である。見えないもの、隠れたものを見るようになるためには、眼は手に転位し、身体を流動し、眼の変様を起こさなければならない。それが存在の転位のはじまりである。／わたしたちの生をおびやかす非平衡性のシステムは、こうした<転位の転位>を不可避的に誘導してきた。無秩序を糧とする生の目盛りは光と闇の、それぞれへの隔たりのなかに存在するといつてよい。／光との不可能な距離を背負い、肉の悲惨さと残酷な諧謔を伴侶にあゆみだす闇——その「ある奇怪なうごめき」は闇の子が光の子になるまでの、はるかな落差と距離に萌す<肉体>の死の拍動であるかもしれない。／わたしたちはこの不可解な微小表象の「うごめき」にたいして、それがどれほど舞踏の動作から逸脱してみえようとも、<舞踏>とよびかけることにはやためらうことはあるまい。／薄膜のなかの「うごめき」は、果たしていかなる辺境からやってきたものか。肉のはずれ、魂のおが屑から、それは自生してきたものか。さては神学の「光の余り滓」（土方巽）から発酵してきたものか。その問いかけにたいする明白な回答は、いまなおわたしたちの面前に開示されたとはいいがたい。そしてまさに舞踏の発生の鍵をにぎる闇は、死のもがりからはみだした仮死の血の華のごとき闇それ自身への、闇からの回帰ではなかっただろうか。」



すべての人は英雄にならねばならない
みずからが冒険者とならねばならない

冒険は精神においてなされねばならない
英雄はまず幼児的なエゴを克服しなければならないのだ

英雄はあらゆる境を超えてゆかねばならない
英雄はみずからの境をこそ超えてゆかねばならない

英雄は旗を振らない
英雄はひとり頂上にいることを選ばない

英雄はみずからの精神に光をともし
英雄あらゆる人の顔に神の顔を見る

英雄は若さではなく成熟をこそ求めねばならない
新しい人間になることこそ英雄となるということだからだ

■ジョーゼフ・キャンベル『千の顔をもつ英雄（上・下）』（ハヤカワ・ノンフィクション文庫 2015.12）

「現代に生きる人間の課題は、絶大な統合機能を持つ神話——現代では「作り話」とされる——が語られていた、相対的に安定した時代を生きた人間の課題とは正反対なのである。かつて、意味はすべて集団の内部、巨大で無名のかたちの中にあり、自己表出する個人の中にはなかった。ところが現代社会では、意味は集団の内部にはなく、世界にもない。すべての意味は個人の中にある。しかし、その意味も完全に見失われている。そのため現代人は、どこに向かって進めばよいのかわからない。自分を駆りたてるものが何なのかわからない。人間の意識と無意識の領域をつなぐ線はすべて断ち切れ、私たちは二つに分断されている。／現代においてなされる英雄の偉業は、ガリレオの時代におけるそれとは異なっている。かつて暗かった場所は、いまでは光がさして明るい。ところが、かつて明るかった場所は、いまでは暗い。調和する魂は住まっていた、失われたアトランティスに、再び光をともし旅に出る行為こそ、現代の英雄がなすべきことなのである。／現代の英雄がこの任務を遂行するとき、近現代の革命によって達成されたものに背を向けたり、目をそむけたりするわけにはいかない。なぜなら、英雄の課題はまぎれもなく、精神的に意味あるものを現代社会にもたらすことだからだ。あるいはむしろ（同じことを別のいい方で言えば）、男性・女性を問わず、現代の生活を通して人間的に十分に成熟させることだからである。現代の生活では事実上、古代のやり方を役に立たないもの、人を惑わせるもの、あるいは有害なものときえみなししてきた。現代の共同体は、いわば地球共同体であり、国境で区切られた国家ではない。そのため、かつては集団内のグループを調整するのに役だっていた攻撃パターンが、現代では逆にグループを分裂させるものとなっている。トーテムのように国旗を掲げる国家の理念は、幼児的な状況を打ち破るのではなく、幼児的なエゴを増幅させるものとなっている。軍事パレードの会場で見られるパロディ的な儀式は、「権力亡者」である専制君主の龍が目的を遂げるには役立つが、利己心を滅ぼす神の役には立たない。無数の反儀式聖者、つまり自分の写真を旗で飾り、公式的な聖画としてどこにでも飾りたがる愛国者たちは境界の番人であり、これは英雄が最初に克服しなければならない問題でもある。」

「新たな象徴が可視化されるとき、その象徴は地球上のさまざまな場所で違って見えるということである。生活のありかた、暮らしている人、伝統といった環境的要因が、すべて効果的に組み合わせられねばならない。その結果、さまざまな象徴を通じて誰にでも同じ救済がもたらされることを理解し、見抜くことが必要になる。『ヴェーダ』には次のように書かれている。「真実はひとつ。人はそれにたくさんのお名前をつけて語る」一曲の歌があらゆる音階で歌われている。したがって、部分の解決に役立つものをいくら喧伝しても意味がない。それは逆に脅威となる。あらゆる人の顔に神の顔を見ることが、人間となるための方法なのである。」

mediopos-416

2016.1.6



ぼくのなかの無垢よ
ちいさなちいさな無垢よ
ぼくはきみを信じられるか
そしてきみはぼくを信じられるか

ぼくのなかの無垢よ
きみはきみ自身を問え
ぼくがきみを信じていないときでさえ
きみがぼくを信じていないときでさえ

ぼくのなかの無垢よ
ぼくがぼくを信じていなくても
きみはきみを信じよ
きみの叫びがぼくにとどくように

■谷川俊太郎編『辻征夫詩集』（岩波書店 2015.2）

（「蟻の涙」より）

「きみのなかに残っているにちがいない
ちいさな無垢をわたくしは信ずる
それがたとえ蟻の涙ほどのちいささであっても
それがあるかぎりきみはあるとき
たちあがることができる
世界はきみが荒れずさんでいるときも
きみを信じている」

（「蟻の涙2」より）

「蟻が涙を流すとは

フェアブルも書いていないが

蟻がいることだけは信じよう

ほらぼくのなかで

もう動き始めている

黒い

疑念の蟻

問え！

という言葉が聞こえる

きみが自分を信じようと信じまいと

激烈に問え！」



■宮田珠己『旅するように読んだ本』（ちくま文庫 2015.6）

旅そのものについて考える二冊の本

アラン・ド・ボトン『旅する哲学』

ヴィクトル・セガレン『＜エグゾティズム＞に関する詩論／羈旅』

「紀行本を読むのが好きで、自分自身も紀行エッセイばかり書いているが、書店の紀行の棚へ行くと、なんとなく違和感をおぼえる。たいていは国名別もしくは地域別に本が並んでいる。それはそれでそうするより他なからうと思うが、そんな棚を前にすると、私が読みたい本はこの棚にはないだろうと思ってしまうのだ。もちろん私の本もそんな棚の中に置かれているわけで、偉そうなことを言えた義理ではないけれども、いったい何がじっくりこないかということ、フランスならフランス、インドならインドの本棚にある本は、フランスのワインやインドの神々が何かについて書かれているということに、物足りなさを感じるのである。その本にはきっとフランスやインドに関する知識や情報が、てんこ盛りになっているのだろう。それを通して、その国の政治だの、人間の生きざまだのに一家言あったりもしているのだろう。／しかし、私が読みたいのは、どうやらそういう本ではないようなのだ。読みたいのは、旅そのものについて書かれた本だ。旅の味わい、旅する喜び、それを真っ向から語る渋みとユーモアのある本が読みたい。行き先なんて、どこでもいいのである。」

「聖なるものはどこにあるのか？ 私は人間たちを見出したただけだ」／現実の旅には、このような落差が必ずつきまとう。期待が大きければ大きいほど、現場に来てみると案外平凡で退屈だったりする。だが実際は、この想像上の期待と、現実における失望の両方の間の行ったり来たりが、旅の本質ということなのだろう。／（・・・）「＜エグゾティズム＞とは（中略）、永久に理解不可能なものがあるということを鋭く直接に近づくことなのである。（中略）さまざまな風習や人種、民族や他者を同化できると自惚れぬようにしよう。逆にそうすることは絶対に不可能だということを楽しもう」『「無理解」を嘆くのではなく逆にそれを極端に称賛することになるだろう』／私はこの本に、自分のあるべき旅のスタイルを教わった。書店でこの手の本に出会うには、いったいどの棚を探せばいいのだろう。」

旅することは
わからないもの
知らないものに
出会うことだ

旅は場所を選ばない
どこに行っただけいい
どこにも行かなくなってもいい

哲学のはじまりは驚きだ
そう言った哲学者がいたが
哲学こそが旅なのだ

その驚きが
深い悲しみでもいい
かぎりない愛でもいい
理解不可能でもいい
旅するように生きること

知っているとなんか思いこまない
こと
知らないということを知ること
そのことに気づくために
人は旅するのだろう



永遠とは時間を超えてあるのではなく
現在という持続のなかにあるのであり
世界があるとは時間があることであり
永遠とは時間の別の名でもあることを
軽やかな静けさのなかで味わいながら
その幸福を生きることができるならば
それこそが生の秘儀なのかもしれない

■清水徹『吉田健一の時間／黄昏の優雅』（水声社 2003.9）

「現時のたえざる持続として捉えた時間を志向の位置に置く吉田健一の時間論と、そこに基礎づけられた彼の文学観と文明観、そして日常を生きる英知のすすめは、すべて、悲劇性の拒否へと収斂する。」

「現時のたえざる持続は始めもなく終わりもなく流れるという時間論は、じつは時間性の消去としての永遠と紙一重の差しかなく、この紙一重の差異に、はたして悲劇性の差異の乗り越えをめざして――それが乗り越えられれば、現時のたえざる持続としての永遠は、時間性のもたらすあらゆる悲劇的なものから清められて、人間を確実に定立させる――、こんにちの文学の世界は、たとえば、一方ではひたすら遊戯性、装飾性、虚構性を求める方向、他方では衝撃的な弁証法、対照のひきつれたような強調、究極の安定をひそかに祈念した動性の激化と破滅への嗜欲、この両者のあいだに、大きく揺れつづけている。そういう状況と吉田健一の時間論とのあいだには、たしかに超えがたいほどの距離があるだろう。だが、その距離は、いわばこんにちの文学の内部にある大きな振幅と等質のものなのだから、そしてこの振幅運動がじつは動きの停止を希念した上のものである以上は、その距離の先にあるものを否定しきる根拠とは断じてならない。言い換えれば、こうしたすべてをつらぬいて、時間というこの至高のものは君臨しつづけているのである。それゆえに、『本当のやうな話』というあのたぐいまれに美しい口ココ小説によって裏づけられた吉田健一の世界が、つよい魅力をもっているということも、改めて確認しておきたい。」



必然は必然の顔をして
偶然を連れてくる
偶然は偶然の顔をして
必然を連れてくる
必然すぎることは息苦しく
偶然すぎることは頼りない
けれどわたしたちは
必然の顔と偶然の顔を表裏にして
かけがえのない「命（めい）」を
生きているのだ

■吉本隆明『夏目漱石を読む』（ちくま文庫 2009.9）

（『門』）「漱石は偶然ということに、ある重さをいつでもかけている人です。漱石の思想のなかには偶然をととも重くみるという考え方があります。この場合も、宗助が苦労して、悩んで解決したというよりも、せっかく座禅までしたけど、何も解決しないで帰ってきて、しかも偶然が安井を遠ざけてしまったということで解けてしまいます。それはとてもいいと思います。自然はしばしば偶然で人間関係の行き詰まりを外らしてくれます。偶然をあまり使いすぎれば、作為された物語になってしまいます。漱石の使う偶然は、ちょうど自然がもたらす偶然なところに留まっています。偶然をあまり排除すれば、逆な意味で虚偽になってしましましょう。漱石は自然のもたらす偶然の速度で詰めてしまいます。これは漱石の思想となって、宗助も、追ってきた読者も同時に息をします。そこをもっと追い詰めて、何か偶然でないものでその作品のクライマックスを解こうともしかんがえたら、あまりいい作品にならなかったかもしれません。ここでは偶然がそれを解いてしまったというかたちで作品のクライマックスを超えていきます。／日常生活のなかでもしばしば、偶然がいろんな問題を解いてしまうということは、だれでも体験することです。優れた作品のなかにも、しばしばあります。優れた作品には二つあって、必然が解決した、つまり、この場合、宗助がおもい悩んで、座禅によって一種の超越的な心境になってこの問題を解いたというような解き方も、ひとつの優れた文学になりうる要素でしょう。しかし、もうひとつの要素は、日常生活でしばしばおこるように、偶然が主人公たちの物語を解いてしまった、その偶然の要素が作品のなかで大きな役割を演ずることが、いい作品のひとつの特徴だとも思います。」



かつて写真は写真であり
その身ぶりは生を表し
神秘であり幻想であった

いまや瞬間は写し取られ
加工され複製される
言葉がコード化され
加工されコピーされるように

写真は発明され技術は進み
今やすべての人がカメラを携えている
すべての人が言葉を使うように

何が変わったのか
写真が変わったのか
言葉が変わったのか
いや変わったのは人だ
人の身ぶりだ

人は深みを忘却した
永遠を忘却したのだ
見えないものは見えなくなり
読めないものは読めなくなった
人は神秘の扉を開けなくなった
扉のあることさえ忘れはて

■ピエール・マッコルラン『写真幻想』（平凡社 2015.7）
（『パリの写真家、アジェ』への序文、一九三〇より）

「なぜなら写真の力強さとは、瞬時の死を創造し、事物や存在にあの通俗的な神秘を――それは死に空想の能力を与える――差し出すことだからだ。／カメラのシャッターは、現像された写真が本質的なものとして出現させる身ぶりのなかで、生を宙づりにする。街路を表す一枚の写真は、全体に文学的な性格を与えることになる細部をほぼ確実に明らかにする。／写真的視角は、事物の密やかな状態に巧みに結びつく。その悲劇的で幻想的な側面をしばしば誇張し、影の領域におけるあらゆる感情的な探査を比較的たやすくする。／レンズによって固定された表情は、いくらでも深く眺められる。それは、一冊の本の端緒にもなりうる、もっとも力強い資料である。」

（訳者解説より／昼間賢）

「ピエール・マッコルランは、日本では、渋澤龍彦や生田耕作といったフランス文学者が愛読した作家として、知る人ぞ知る存在である。最初の翻訳は一九三六年。小説『女騎士エルザ』と『地の果てを行く』の二冊が名訳者永田逸郎の訳で出版されている。（・・・）またフランス映画に詳しい方なら、マルセル・カルネ監督の名作『霧の波止場』の原作者の名前を記憶にとどめておいてだろう。（・・・）そして実は写真の分野でも、マッコルランの役割は、たとえば今橋映子の名著『＜パリ写真＞の世紀』のなかで、「両大戦間に新しいメディアとしての写真批評に手を染めた作家」として積極的に評価されている。とはいえ、一般的には、日本だけでなくフランスでもほぼ無名の、忘れられた存在である。」

「二〇一五年の今日、写真は、いや写真イメージは、私たちの生活に欠かせない重要な構成要素となっている。実際には、何世紀ものあいだ情報伝達のほぼ唯一の手段であった文字にとって代わるほどの勢いで増殖している。罗兰・バルトがあれほど執念深く立ち立てた「それはかつてあった」の概念も、バルト自身がその創出と同時に消滅をも示唆したように、今日どれほどの人がその切実さを受け止められるか、心もとなく思われる。自分とは絶対に違う事物の、他者の写しをそのまま受け取ること。見ず知らずの人々がともに生きる社会の基本形態が、日本では特に数年来、かつてなかったほど激変し劣化していくなかで、文学を研究し、音楽文化を探求してきた訳者に、写真への関心が急速に芽生えることになった、マッコルランは、写真について語りながら、まるで昨日のこのように、フランソワ・ヴィヨンの生きた一五世紀のパリを想起しているが、翻って私たちは、マッコルランの生きた時代――十九世紀末から二十世紀後半にかけて――を、同じくらい易々と、身近に思い出せるだろうか。ロジェ・グルニエがまさにマッコルランの写真的見解を引用しながら、『写真の秘密』に記した次の一節「こうした昔の写真の前にすると、わたしは、現在とはひとつの異国ではないかという印象を禁じえない。わたしはその異国に追放されて暮らしているのである」が、比喩でも表現でもなく、切実な認識に思われてならない。写真についてのマッコルランの表現は、写真のすべてがほぼ完全に変わってしまった今日ではもうなしえない営みかもしれない。序文の名手だったマッコルラン。写真を証言として捉えていたその言葉遣いは、いわば評言の芸術である。一枚一枚の写真を自己の深みにおいて捉え、言葉にして表し返すこと。その掛替えのなさを、忘却に沈んでいたこれらの言葉から引き出して、もう忘れずに、覚えておこう。文学から、言葉から写真へ、もう一度。」



■柿沼 裕朋 編『版と画の間／駒井哲郎・加藤清美・坂東壮一・日和崎尊夫・柄澤齊・菊池伶司』
(平凡社 (2014.4))

(柿沼 裕朋「言葉としての版画」)

「版画は言葉である。いつ頃からか、この考えが私の内部を充たし、呪文のように身体にこびりついて離れなくなってしまった。ある種の版画を前にすると、白黒の画面に刻印された何万本もの点と線から、インクの匂いではなく芳醇な言葉が香り立つのを感じ、たちまち魅了されてしまうのだ。／版画のなかには、言葉の匂いのするものがある。／例えば、精神性や観念が構成やマチエールと見事に一致した絵、つまり物質的に強度のある絵画を美術館で見た瞬間、その絵の一带だけが明るく感じられるわけだが、このようにある種の版画を見た瞬間にも、いわく言い難い言葉の煙のようなものが立ち込めてきて、絡め取られてしまうのだ。版画を見たときの感覚とは違い、その感触は、心情にぴったりと沿った書物の読後の余韻にも似ている。しかし、それらの言葉は、文学的と形容されるものではない。意味ある言葉ではなく、あくまで、版画から受ける印象が言葉となって香り立ち、私の眼に映るたびに匂い、どこからともなく囁きかけてくるのだ、「版画は言葉である」と。」

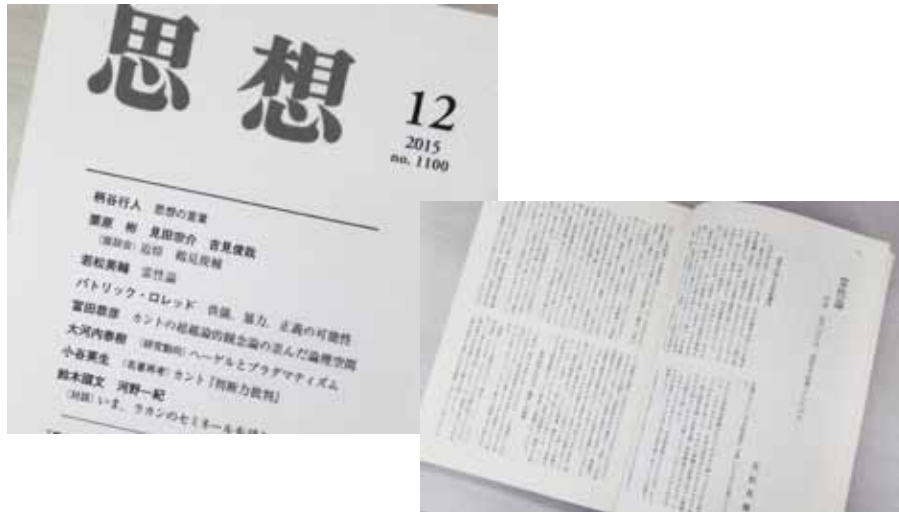
世界は言葉である
人の言葉はその影
あらゆる根源を照らす
光の書物が
世界となって現れている

人は言葉である
ほんとうの言葉を求めてやまない
光を乞い求める言葉である

ほんとうの言葉は
嘘をつくことができない
嘘さえもがほんとうになって現れる

言葉の香りは
言葉の色は
言葉の音色は
その人となって
世界のキャンパスで踊っている

かつて人となった
世界の言葉があり
世界を照らし続けている
人はその言葉を
探し続けてやまない



今を超えるために
今を深める

時は今によって
永遠へと広がるのだ

個を超えるために
個からはじめる

霊は個によって
永遠へと深まるのだ

■若松英輔『霊性論』(岩波書店 2015.12)

(「思想」2015.12/no.1100 所収)

「透徹して極められた個の霊性は、あるとき、個を超えて、「超個」的な霊性として世に現れる。個を通じて、個を超えるものが顕示される、それが近代における霊性の働きの特徴なのである。近代における霊性論は、個の問題と切り離して考えることはできない。それは特定の画家によって時代の美ともいべきものが表現されるのに似ている。／十九世紀のアメリカ・ボストンを中心に起こった霊性運動は必然的に個の霊性を屹立させ、独断的な宗派的世界観の終焉を告げることになった。エマソンの著述にそれがあることはすでに見たが、エマソンの影響を受けたホイットマンもまた、新しい世界の到来を高らかに謳った。」

「宗教史と霊性史の地平は、ほとんど世界を異にするといつてよい。宗教史においてそれらは不可避的に交流する。キリスト教の歴史が消滅しているのではない。キリスト教が他の宗教から隔絶して存在しているような在り方は、霊性的世界においては不可能であることをホイットマンは示そうとしているのである。／霊性論における大拙の大きな功績は「霊性」を共時的構造、すなわち超時間的実在として力動的に論じたところにある。共時的とは、物理的、かつ計測可能な時間軸の上にはなく、これを超越した「時」の流れを指す。本論では前者を「時間」、後者を「時」と書き分けることにする。共時的とは、永遠の今を基点に、現在はもちろん、過去・未来を「今」として、とらえる視座にほかならない。もし、大拙が「時」を認識していなかったとしたら、法然と親鸞は、二つの個別な生涯を送ったが霊性においては「一人格」である、という着想が生まれることはなかっただろう。大拙もホイットマンを読んでいる。／日本でホイットマンをもっとも激しく受容した人物の一人として有島武郎を挙げることができる。彼は自らこの詩集を訳している。また、有島の近くに接し、ホイットマンに強く動かされたのが柳宗悦だった。彼は、一九三一年に寿岳文章とともに雑誌『ブレイクとホイットマン』を刊行している。柳はホイットマンを知ったのは内村からだっただかもしれないと書いている。／若き柳はある時期、内村が主宰する無協会の集まりに参加していた。(・・・)ホイットマンを知ったのと同時期に柳は、エマソンにも出会っている。学習院時代の教師で、のちにも柳が師であると語り敬意を抱き続けた服部他之助がエマソンの研究者だったのである。(・・・)師によって示された宗派的な違いを超えてゆこうとする趨勢は、柳の生涯を貫いた。」

「朝鮮の陶磁器や木喰との邂逅を経て。「民藝」の発見者となる以前に柳は、神秘哲学を実存的に論じた宗教哲学者だった。(・・・)／柳は学習院時代からの大拙の弟子である。その関係は生涯変わらなかった。彼らはともに、「霊」あるいは霊性の場に、宗旨の彼方へ飛躍する可能性を見出していた。こうした柳の試みに培われた時代精神はのちに、吉満善彦や井筒俊彦の哲学に流れ込むことになる。」



■町田康『供花』（新潮文庫 平成十三年九月）

(倅いである)

「わらわれた人	呪われた人	むち打たれた人
不仕合わせな人	拷問された人	縛られた人
狂わされた人	踊っている人	不仕合わせな人
無力な人	号令された人	殴られた人
命令された人	並ばされた人	虐殺された人
犯された人	その他の全ての人	

自転車積みあげて 駅に放火せよ
倅いである ラッキイである
何も信じるな
倅いである ラッキイである
何も考えるな

*解説：福田一也 より

「町田氏の場合は、いわば詩語と散文が、相互乗り入れ状態になっている。たしかにそのような状態を目指した作家、小説家というものもいて、つまりはいわゆる散文詩とか、詩文小説といったものがその類なのだ。詩語、散文の融合をめざしたそれらの試みと違って、町田氏の場合ははじめから言葉のあり方が、いわば共通の水準に立っている。ここにも、無論、詞におけるのと同様に、町田氏の散文における、いわばエロキューションの努力があり、それまでの小説の文体とは異質な、きわめて革新的な口承演芸を思わせるような文の呼吸による分節があって、はじめて詩の言葉がそのまま小説の言葉として生動した。／要するに、町田氏の創作において言葉は、詞、詩、散文の、三つの、近代においては互いに大きな段差があるとされてきたジャンルにおいて、ほぼ同一の地平に存在をさせているのであり、ジャンルの差異を問わず、ほぼ同じ有様をしている。その事は、逆の視点からいえば、音楽にしろ、小説にしろ、そのなかで、つまりは旋律と随伴して発生され、あるいは叙述、描写、会話の中に記述されつつなお詩であるような、楽曲と文体の発明こそが、氏の音楽と小説における取り組みの主体をなす、と云えるかもしれない。」

はじめに言葉があった
ジャンルはなかった
ないジャンルを超えることは要らない

はじめに倅いがあった
倅いと不倅いの境はなかった
ない境はどこで生まれたのだろう

はじめに信仰はなかった
信仰と不信仰の境はなかった
信仰はどこで生まれたのだろう

はじめに思考はなかった
思考と無思考の境はなかった
思考はどこからやってきたのだろう

はじめに偶然はなかった
偶然と必然の境はなかった



■ローレンス・M・クラウス『ファインマンさんの流儀／量子世界を生きた天才物理学者』
(ハヤカワ文庫 2015.5)

(リチャード・ファインマン)

「僕らは何をやっているのかという、僕らは探求しているのだと思う——僕らは、世界についてできるかぎりたくさんすることを見出そうとしているんだ……僕が科学に関心を抱いているのは、世界についてより多くのことを見出したいからで、それだけであり、より多くを自分で発見できたなら、なおのこと結構だ。」

ローレンス・M・クラウス エピローグ「性格こそ運命なり」より

「もしかしたら、彼がもっと他人の話に耳を傾け、周りの人々から学ぼうとし、さらに、絶対にすべてを自力で発見するんだと、徹底的にこだわったりしなかったなら、彼はさらに多くのことを成し遂げられたかもしれない。しかし、達成は彼の目的ではなかった。彼の目的は、世界について学ぶことだった。彼は、楽しみは何かを発見することにこそあつと感じていた——たとえそれが、彼以外の世界中の人々がすでに知っていることだったとしても。ある発見で、誰かに先を越されていたことをあとから知るといふ経験をすると彼は、落胆するのではなく、「へえ、われわれはちゃんと正しい答えを得ていたんだ。それってすごいじゃないか」と言うのだった。」

わからないことがわかるのは楽しい
世界のなどを見つけるのは楽しい
自分のなどを見つけるのは楽しい

間違うのは楽しい
学ぶことができるからだ
間違うことを恐れないだけで楽しくなる

だれかが教師なのではない
人も世界もすべてが教師なのだ
問いさえ持つことができたら
何からでも学ぶことができる

最も遅れるものが最初に行くこともある
最も進んだものが最後になることもある
楽しくゆければそれでいいのだ



■伊藤邦武『プラグマティズム入門』（ちくま新書 2016.1）

「現代の私たちの世界では、きわめて多様な意見や信念が日々洪水のように渦巻いている。このような世界において、「絶対的に確実な知識の追求よりも、暫定的だが信頼に足る指標の発見が重要である」というパース、デューイの発想や、「異質な信念どうしの持続的な対話によって、これまで想像のできなかった新しい経験の地平は生み出される可能性がある」と考えるジェイムズ思想は、たしかに魅力的な考え方である。」

「哲学思想としてのプラグマティズムは、当然ながらわれわれの認識の正しさや真理性の特徴を明らかにすることを課題とする。しかし、この課題を果たすためにこの思想が行うのは、認識の真理性の絶対的な根拠を求めることでもなければ、その可能性の理由を定義することでもない。プラグマティズムが問おうとするのは、真理を求めようとする場面において、われわれ人間が採用すべき対話の形式や、問答の枠組みのあり方である。それは真理や価値の最終的な決定であるよりも、その「追求」のスタイルの反省である限りにおいて、開かれた柔軟な哲学という特徴をもっており、そしてまさにこの特徴のゆえに、多くの哲学者たちのアイデアを受け入れ、吸収する力をもってきたのである。」

どこに向けて歩き出すのがよいか
地平の向こうに行こうとするなら
まずは地平に向かって歩くことだ

川をこちらから向こうへ渡るとき
橋があるならその橋を渡ればいい
橋が確かでないときもそれなりに

石橋を叩いて壊してしまうよりも
石橋を確かめながら渡れるならば
向こう岸に渡ることができるのだ

そこからまた戻るのもいいだろう
地平の彼方へと歩きだすのもいい
橋を確かにするならばそれもいい